



まつりの家で、記念撮影をすることになった。

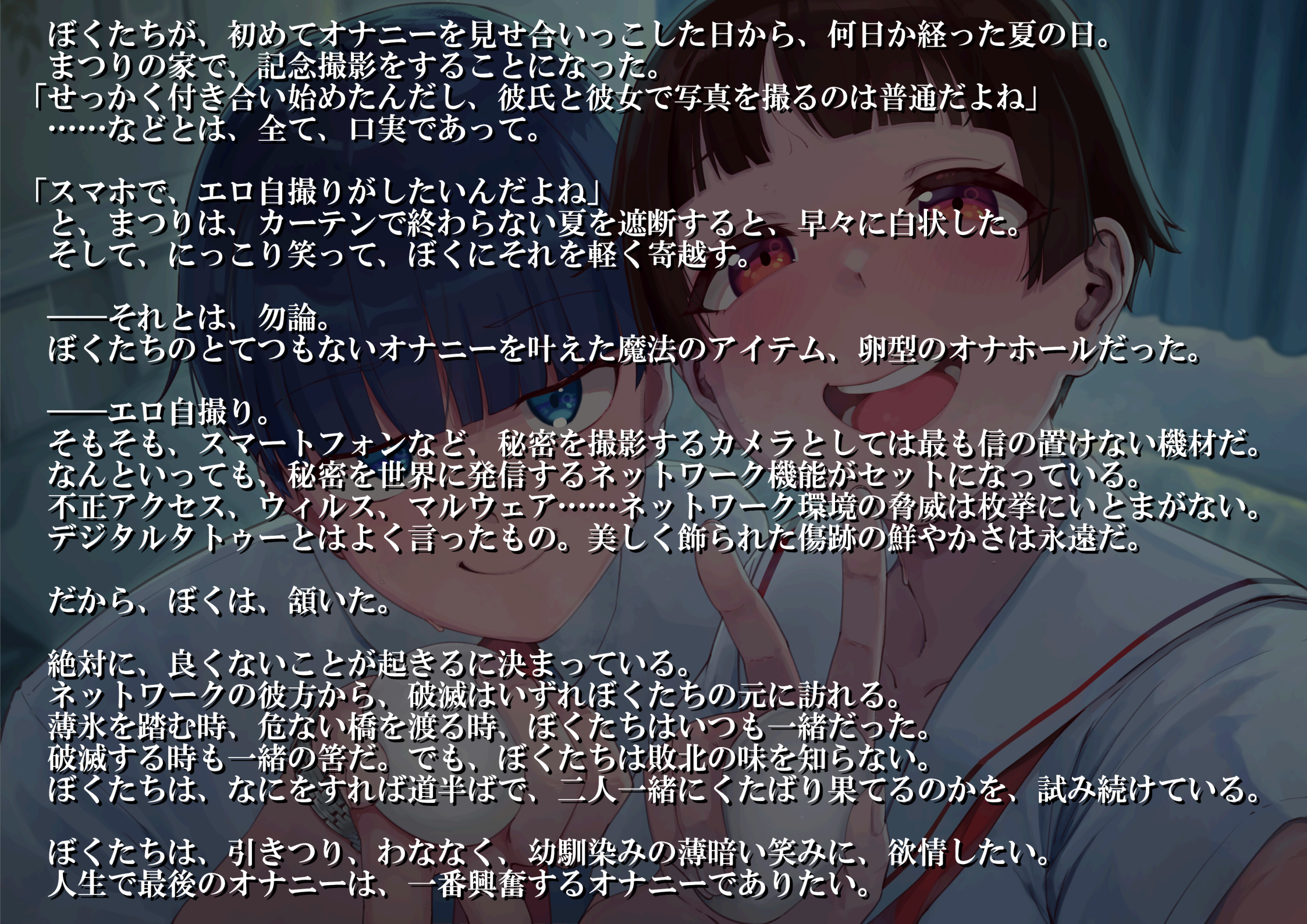
……などとは、全て、口実であって。

「スマホで、エロ自撮りがしたいんだよね」

そして、にっこり笑って——

甘々と甘出し

その後のぼくたち



ぼくたちが、初めてオナニーを見せ合いっこした日から、何日か経った夏の日。
まつりの家で、記念撮影をすることになった。
「せっかく付き合い始めたんだし、彼氏と彼女で写真を撮るのは普通だよね」
……などとは、全て、口実であって。

「スマホで、エロ自撮りがしたいんだよね」
と、まつりは、カーテンで終わらない夏を遮断すると、早々に白状した。
そして、にっこり笑って、ぼくにそれを軽く寄越す。

——それとは、勿論。
ぼくたちのとてつもないオナニーを叶えた魔法のアイテム、卵型のオナホールだった。

——エロ自撮り。
そもそも、スマートフォンなど、秘密を撮影するカメラとしては最も信の置けない機材だ。
なんといっても、秘密を世界に発信するネットワーク機能がセットになっている。
不正アクセス、ウィルス、マルウェア……ネットワーク環境の脅威は枚挙にいとまがない。
デジタルタトゥーとはよく言ったもの。美しく飾られた傷跡の鮮やかさは永遠だ。

だから、ぼくは、頷いた。

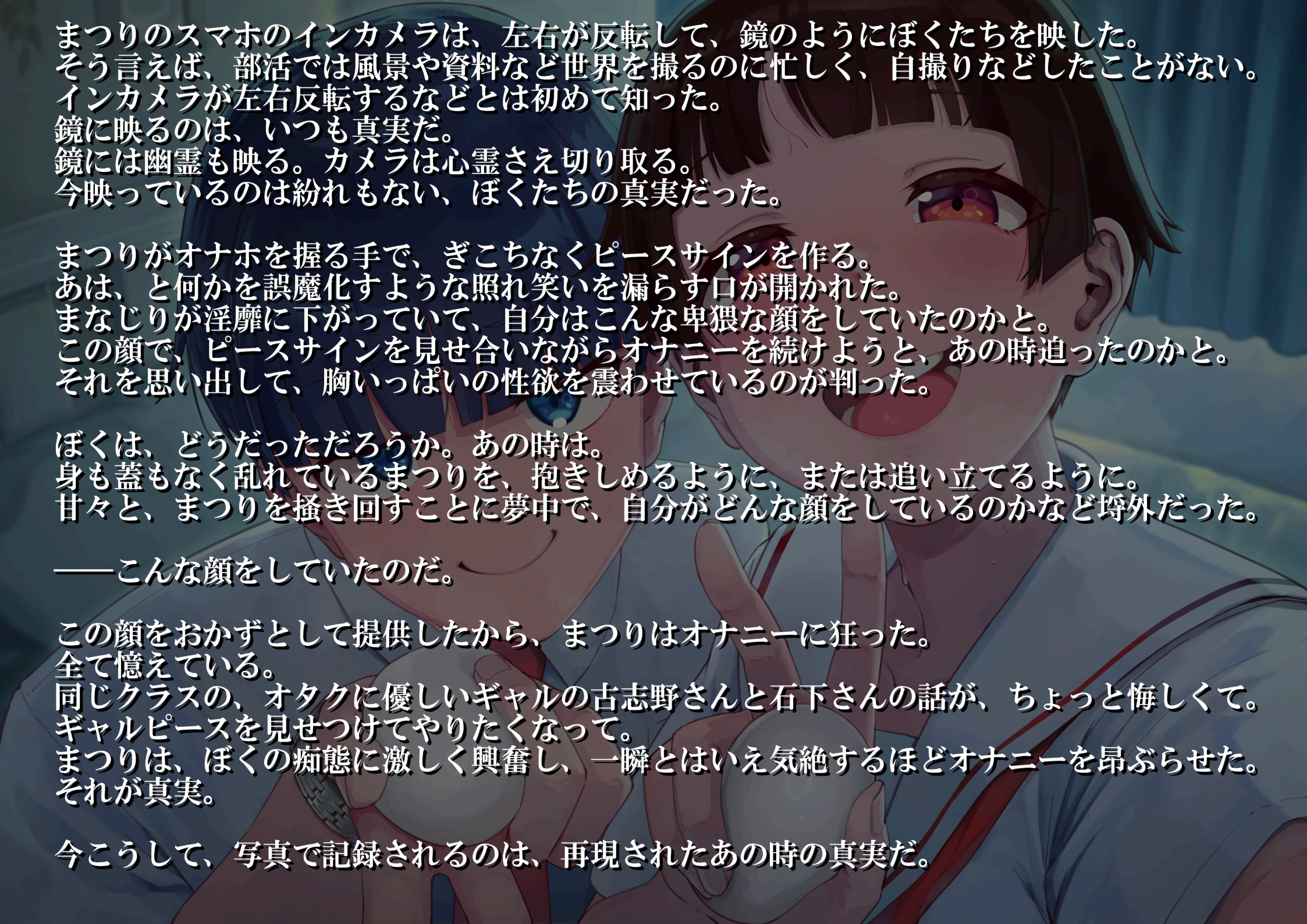
絶対に、良くないことが起きるに決まっている。
ネットワークの彼方から、破滅はいずれぼくたちの元に訪れる。
薄氷を踏む時、危ない橋を渡る時、ぼくたちはいつも一緒だった。
破滅する時も一緒の筈だ。でも、ぼくたちは敗北の味を知らない。
ぼくたちは、なにをすれば道半ばで、二人一緒にくたばり果てるのかを、試み続けている。

ぼくたちは、引きつり、わななく、幼馴染みの薄暗い笑みに、欲情したい。
人生で最後のオナニーは、一番興奮するオナニーでありたい。

まつりのスマホのインカメラは、左右が反転して、鏡のようにぼくたちを映した。

鏡に映るのは、いつも真実だ。
鏡には幽霊も映る。カメラは心霊さえ切り取る。
今映っているのは紛れもない、ぼくたちの真実だった。





まつりのスマホのインカメラは、左右が反転して、鏡のようにぼくたちを映した。
そう言えば、部活では風景や資料など世界を撮るのに忙しく、自撮りなどしたことがない。
インカメラが左右反転するなどは初めて知った。
鏡に映るのは、いつも真実だ。
鏡には幽霊も映る。カメラは心霊さえ切り取る。
今映っているのは紛れもない、ぼくたちの真実だった。

まつりがオナホを握る手で、ぎこちなくピースサインを作る。
あは、と何かを誤魔化すような照れ笑いを漏らす口が開かれた。
まなじりが淫靡に下がっていて、自分はこんな卑猥な顔をしていたのかと。
この顔で、ピースサインを見せ合いながらオナニーを続けようと、あの時迫ったのかと。
それを思い出して、胸いっぱいの性欲を震わせているのが判った。

ぼくは、どうだっただろうか。あの時は。
身も蓋もなく乱れているまつりを、抱きしめるように、または追い立てるように。
甘々と、まつりを搔き回すことに夢中で、自分がどんな顔をしているのかなど埒外だった。

——こんな顔をしていたのだ。

この顔をおかずとして提供したから、まつりはオナニーに狂った。
全て憶えている。
同じクラスの、オタクに優しいギャルの古志野さんと石下さんの話が、ちょっと悔しくて。
ギャルピースを見せつけてやりたくなって。
まつりは、ぼくの痴態に激しく興奮し、一瞬とはいえ気絶するほどオナニーを昂ぶらせた。
それが真実。

今こうして、写真で記録されるのは、再現されたあの時の真実だ。

ふたり同時に、興奮が容量の限界に達して溢れるように。
打ち合わせもアイコンタクトもなく、ぼくたちは競うように虚空に舌を突き出す。
湿度の高い吐息とともに、赤ん坊のようにあどけない、言葉にならない声を漏らして。

——ぼくたちは虚空を舌で舐め上げ、唇で吸い、唾を啜り込む。

さあ、ふたりでふたりに、ご奉仕を始めよう。



ふたり同時に、興奮が容量の限界に達して溢れるように。
打ち合わせもアイコンタクトもなく、ぼくたちは競うように虚空に舌を突き出す。
湿度の高い吐息とともに、赤ん坊のようにあどけない、言葉にならない声を漏らして。

——ぼくたちは虚空を舌で舐め上げ、唇で吸い、唾を嚙り込む。
掌を伸ばされた犬が、主人を愛おしんで舌をせわしく動かすように。
ぼくたちは、ぼくたちにひとつずつ突き出された、不可視の陰茎を激しく愛撫する。

ぼくたちはまるで誓ったように、インカメラの小さなレンズにだけ視線を注いだ。
レンズの向こう側は、鏡合わせの世界、または、ほんの少し先の未来。
オナニーのために、エロ自撮りに卑猥な視線を注ぐ、ぼくたちの未来だ。
ぼくも、まつりも、きっとぼくたちにフェラチオを命じる妄想に興じることだろう。
幼馴染みの頭を並べて、吐息と唾液で湿る口をオナホール同然に扱うつもりなのだ。
鏡合わせの世界が捻れる。ぼくはまつりに、まつりはぼくにひざまずく。
さあ、ふたりでふたりに、ご奉仕を始めよう。幼馴染みの悦びはぼくたちの喜びだから。
でも、うっとりとする余裕たっぷりにぼくたちの舌と口を味わってられるのも初めだけ。
次第に、ぼくたちの容赦なく性感を引き摺り出すような舌技に悶えることになる。
従順で都合の良い、精子の排泄孔だと侮った報いを受けることになる。
ぼくたちは幼馴染みをよがらせるためなら何でもする。簡単な絶頂などもってのほか。
一日中でも、亀頭がふやけても、遅延され続ける射精感にもがき苦しもうとも。
悲痛な叫びを上げて、涙ながらに懇願しても、ぼくたちは陰茎を口から離さない。
微笑んでむしゃぶりつく。サディスティックに過ぎるだろうか。いいや、違うね。
ぼくたちは暴力は好まない。侵略を望まない。
ただ、知性をかなぐり捨てて悦楽に支配された幼馴染みを、抱きしめてあげたい。
まるで、剥き出しになった心に直接、愛おしく舌と唇を這わせ慰撫するように。

ぼくたちの口は精液を捨てる穴ではない。
性快楽に軋む幼馴染みの魂を舐めしゃぶる、魔物の口だ。

——まつりがスマホ側面のシャッターボタンを押している。

何度も、何度も。
かしやり、かしやりと——

同じ発情を分かち合う、世界でただ一人の幼馴染みの声で、全身の血流が甘い。

——精液を吐くことも知らず、高まる血の流れに快感を覚えていたあの頃に、もしも。



——まつりがスマホ側面のシャッターボタンを押している。

何度も、何度も。

かしやり、かしやりと、シャッター音を模した電子音がぼくたちを切り取り続ける。

それはどう言いつくろっても、異様な光景と時間だった。

陽光を遮られ、夕暮れのような影に沈む部屋に、吐息と唸りと液体を啜る音が浮遊する。

交わす言葉はなく、指一本とて触れ合うこともない。

ただ、お互いの口から止めどなく溢れる、発情の気配がお互いの耳を犯している。

同じ発情を分かち合う、世界でただ一人の幼馴染みの声で、全身の血流が甘い。

血液までもがピンク色になったような気分だ。

呼吸の度にふわふわと、鼻腔の毛細血管が、寄せては返す波に似た軽い絶頂を繰り返す。

幼い頃、精通を知らぬ頃の絶頂とは、鼻腔と股の鼠径部への甘やかな衝撃だった。

それを思い出す。性器を刺激せずとも、ただ甘い予感に満たされた至福の幼少期。

まつりはいつしか、ぼくの横顔に性欲を覚えるようになったのだという。

幼馴染みの横顔を盗み見てこっそりオナニーをしていたとは隅に置けないけれど。

ぼくは、まつりの真正面からの、満面の笑顔だった。

叶えたいことがあるから一緒に行こうと、ぼくに手を伸ばす時の笑顔。

ぼくを疑いもしない、ひたすら純粋な信頼の笑み。

誰かを困らせる目的のいたずらなど一切しないくせに、設定する目的はいつも無茶苦茶。

達成困難な目的のための計画を練り、ぼくの手を掴んで冒険に飛び出していく。

その笑顔に、幼いある日、急に胸が甘めき、腰の奥が疼いたのだ。

——精液を吐くことも知らず、高まる血の流れに快感を覚えていたあの頃に、もしも。

ぼくたちが、キスをしていたら。

まるで、鏡合わせの、雌雄の区別もつかぬ、同じ顔形だったあの頃に。

毛細血管と粘膜をくすぐり合う、性衝動に正直な、ディープキスをしていたなら……。

——ああ、そうだ。こんな風に、気持ち良かったに違いないよ。

——まるで、鏡の向こう側と触れ合うように。

とろけてしまう。口も、息も、舌も、眼も。

——ぼくは、ずっと昔から——



——ああ、そうだ。こんな風に、気持ち良かったに違いないよ。

打ち合わせもアイコンタクトもなく。どっちが後先かも判らない。
気がつけば、ぼくたちはキスをしていた——まるで、鏡の向こう側と触れ合うように。
粘膜を舐めあい、性器を挿入したりされたりするような、ぼくたちのディープキスで。
毛細血管が喜悦の内に拡張し、神経細胞が官能に励起される。
とろけてしまう。口も、息も、舌も、眼も。
精通前の絶頂にも似た、甘々とした至福を、ぼくたちは分け合っている。

忘れもしない、甘出し射精を高め合った数日前の相互視姦オナニーのさなか。
ぼくは、おさわり禁止のルールを破って、まつりの初めての唇を奪ってしまった。
キスしたぐらいで終わるようなぼくたちの恋とオナニーじゃないと思ったからだけだ。
思い合っているとはいえ、無断のキスなど死刑にも相当するだろう。
自分でも思う。ぼくらしくない行動だったと思う。
だけど今、ようやく、その理由が判った。

——ぼくは、ずっと昔から、まつりの笑顔にキスがしたかったのだ。

突破困難な難問に疎み、弱気の虫に憑かれそうになるまつりを、いつも励ましてきた。
まつりの笑顔が好きだったから。
勇気を取り戻して再び前に進めるようになったまつりの笑顔の味が、知りたかったから。
幼かったあの頃からずっと、ぼくは笑顔のまつりとセックスのようなキスがしたかった。
オナニーを愛していることも、キスでしあわせになることも、罪じゃない。
まつりが天性のオナニストなら、ぼくは極度のキス魔だったのだ。

——まつりが、スマホ側面のシャッターボタンを押している。

何度も、何度も。

かしやり、かしやりと、シャッター音を模した電子音が、ぼくたちのキス顔を切り取る。手元が動揺しないように、構図をずらさないように——いやいっそ、落ち着き払って。

ぼくと興奮した視線を絡ませたまま、スマホの画面を一瞥もせぬまま。

しかし、ぼくたちを、被写体として活写するべく。

スマホを構えた右腕を正確に、同じ位置同じ高さ同じ角度に固定したまま。

まつりは、シャッターを切り続けている。

——まつりの、こんな所が、いつも眩しい。

普通の恋人同士なら、キスをしたら、スマホを投げ捨て、セックスをするのだろう。

でも、ぼくたちはそうじゃない。

ぼくたちには、目的遂行の約束がある。

どんな時も、ふたりの掌を重ねて、目的を信じて、約束を硬く握りしめてきた。

——今日の場合、それは、エロ自撮りだ。

セックスでもハメ撮りでもない。

所有しているだけで厄災を呼び込む、最高にアブない写真の数々をぼくらの手に収める。

その写真はお互いのオナニーのため。ふたつの孤独な夜を、一条の絆で繋ぐため。

それが、今日のぼくたちが挑む冒険だ。

訊くも愚問という奴だが、まつりの口から目的を聞いたかった。

「今日は、どこまで撮るのかな？」

まつりは、舐めたら確かに甘い味がした、とろりと欲に塗れた微笑みで、答えた。

「亀頭でオナホを回して、甘出し射精してるところ、いっぱい……撮ろ？」



「今日は、どこまで撮るのかな？」

「亀頭でオナホを回して、甘出し射精してるところ、いっぱい……撮ろ？」

——おわり